大阪・大坂城跡

1 所在地　一　大阪市中央区内本町一丁目、二　大阪市中央区南新町一丁目、三　大阪市中央区内平野町三丁目

2 調査期間　一　一九九一年（平3）七月～八月、二　一九九二年六月～七月、三　一九九二年六月～七月

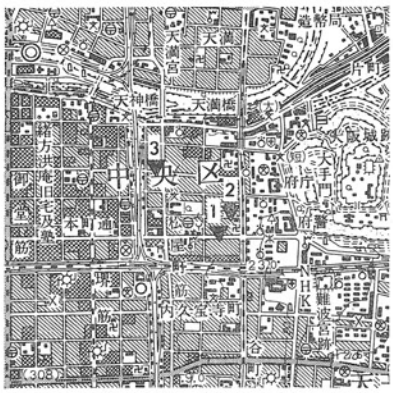
3 発掘機関　㈶大阪市文化財協会

4 調査担当者　一　積山　洋、二　黒田慶一、三　清水　和

5 遺跡の種類　城郭跡・城下町跡

6 遺跡の年代　奈良時代～江戸時代

7 遺跡及び木簡出土遺構の概要



（大阪東北部）

一　ＯＳ九一―三四次調査

調査地は大坂城三の丸の外側の町屋にあたり、当時の主要街路のひとつである本町通りに面している。地形は東から西に緩く下がる傾斜地である。

木簡は直径約一ｍ、残存深度〇・八ｍの円形土坑または井戸から一点出土している。共伴遺物は青花、伊万里焼、唐津焼、備前焼、土師器焙烙などで、遺構の埋没年代は一七世紀前半～中葉とみられるが、やや降るかもしれない。

二　ＯＳ九二―一二次調査

調査地は豊臣氏大坂城の惣構部分にあたり、地形的には上町台地の西の落ち際で東から西に傾斜する。木簡三点はいずれも、陶磁器・瓦・木製品・植物遺体を多く含む層厚二〇～三〇㎝の砂礫を主体とする第二盛土中から出土した。第二盛土は秀吉晩年の慶長三年（一五九八）の「大坂町中屋敷替」で撤去されたと考えられる礎石建物跡の上に堆積し、その上面は平坦に整地はされているが遺構はみられない。第二盛土直上には層厚三五～七〇㎝の粘土を主体とする第一盛土がのっている。この第一盛土は台地の地山土の偽礫で形成されていることから、当調査地の東数十ｍの谷町筋に想定される三の丸の堀の掘削時の排土によって整地されたのかもしれない。

三　ＯＳ九二―一六次調査

調査地は、船場を城内と隔てる東横堀川を平野橋をへて東進し、松屋町筋にいたる道筋の南側に位置する。豊臣後期以降当該地周辺は、商業・河川交通の要として相応の賑わいを呈していたと考えられる。西隣には十人両替商米屋平右衛門の屋敷があったともいわれている。

出土した木簡は七点である。(1)〜(6)は、一八世紀中頃の陶磁器類を伴う土坑（長辺約五m、短辺約二m、深さ約一m）から出土した。また、(7)は、蓋板あるいは底板で、八世紀後半の土器類を伴う土坑（長辺約三m、短辺約一・七m、深さ約〇・八m）から出土している。

8　木簡の釈文・内容

一　OS九一—三四次調査

(1)　「〈□□兵衛」　151×28×7　033

上端左右に切込みのある荷札木簡である。

二　OS九二—一二次調査

(1)　・「〇□□又右衛門」　122×33×8　011

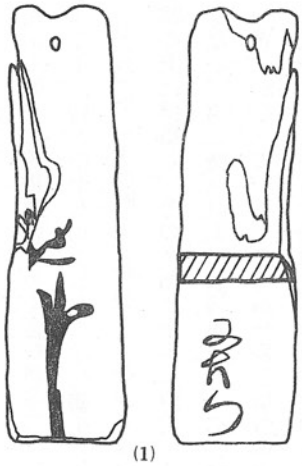
・「〇□□　」

(2)　「〈丁（彫り）」　83×17×4　032

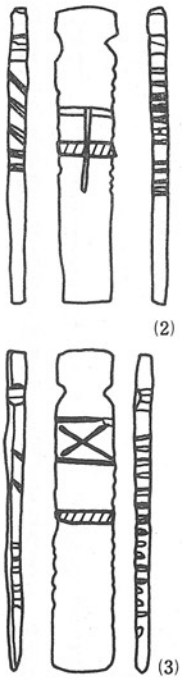
(3)　「〈☒（彫り）」　90×17×5　032

(1)は上端に穿孔が、(2)(3)は上端左右に切込みがありいずれも荷札木簡と思われる。(2)(3)はともに墨書はなく、表面に屋号が彫込まれており、側面にも波状の彫込みがある。

（OS九一—三四次）



（OS九二—一二次）



0　5　10cm
1：2

三　OS九二―一六次調査

(1)
・□小□〔須カ〕。
　□□□
・　与吉
　。　(67)×25×7　019

(2)
＜○□　(249)×42×8　032

(3)
「い〔屋号〕□」　202×42×8　011

(4)
・＜○□」
・＜○□」　(200)×52×8　032

(5)
・「＜　□」
・「＜　□」　420×34×6　033

(6)
・「○□」
・「○□」　123×24×3　015

(7)
・□
・□　(径)115×52×(厚)8　061

(1)～(6)はいずれも、形状から荷札木簡と考えられる。(7)は半円形の蓋または底板で、片面には彫り込みがある。

（一　積山　洋、二　黒田慶一、三　清水　和
釈文　鳥居信子・豆谷浩之）

木簡研究　一四号　木簡釈文の訂正とお詫び

五四頁掲載の大阪・住友銅吹所跡の木簡(2)

（誤）「運掛銅正味百斤入
　　泉屋吉左衛門支配」　540×(171)×17　061

これを左記のように訂正致しますとともに、関係者各位にお詫び申し上げます。

（正）〔運上掛銅カ〕
「□□□正味百斤入
　泉屋吉左衛門支配」　540×(171)×17　061

（編集委員会）